

1 研修期日 平成23年 7月 1日（金）

2 研修先 学校名 岐阜県高山市立東小学校
所在地 岐阜県高山市松之木町2962番地1
<http://www.city.takayama.gifu.jp/ga/higasi-e>

3 研修内容

平成21・22・23年度 文部科学省指定研究開発学校第3年次報告会
《研究開発課題》
LD・ADHD等を含め、特別な支援が必要な児童一人一人の教育的ニーズに応じた弾力的な教育課程の編成及び効果的な指導や支援、評価の在り方に関する研究開発
《研究主題》
主体的に学び、仲間と共に自分の力を高めていく子の育成
～ 一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程の編成と指導の工夫を通して ～

（1）東小学校の研究開発構想

① 研究の視点

○ 個の教育的ニーズに応じた教育課程の編成

個々の児童のよさや課題を見だし、児童が主体的に取り組めるよう、弾力的な教育課程を編成する。

○ 個の教育的ニーズに応じた指導の工夫

個々の児童の得意な面を学習場面で生かし、つまずきに応じた支援を行うとともに、学ぶ喜びのある授業を創造する。

② 個々の児童の実態に応じた教育課程の編成

○ 一人一人に応じた支援体制

- ・ 特別支援の必要な児童は、その実態に応じて特別支援教室で学習（総時間数の80%を通級するタイプⅠから通常学級で配慮しながら指導するタイプⅤまでに振り分けて、個に応じて指導をしている。）

※ 特別支援学級と通級指導教室をどちらも特別支援教室として再編成（平成22年度から）

- ・ 支援シートをもとに個別の指導計画を作成（評価方法まで記入）
- ・ 時間割の調整と支援員の配置の決定（前週の火曜日までに時間割の決定と支援員の希望を提出し、コーディネーターが最終調整と打ち合わせ）

○ 支援シートと単元の指導計画をリンクさせた支援の方法の検討・実践

③ 授業の中での支援の工夫

○ 特性に応じた多様な支援方法を工夫し、どの子にも分かりやすい授業を展開

- ・ 教材・教具に関わること

視覚的手がかり、聴覚的手がかり、言語的手がかり

- ・ 活動に関わること

運動的手がかり、体験的活動、仲間との活動、教師の働きかけ

- ・ 支援体制

特別支援教室との連携

○ つまずきに応じた支援で、学ぶ喜びのある授業の創造

（2）公開授業参観

① 通常の学級

○ 指導案の中に配慮を要する児童への指導が明文化

指導案の中に配慮を要する児童の座席の位置はもちろんのこと、指導の方針や手だて、該当児童の本時の学習のねらいや評価規準までもがきちんと明文化されている。児童の

実態から必要な支援までがいかにも明確に捉えられているか驚いた。

○ だれにでも分かりやすいが明確に

配慮を要する児童をメインに分かりやすい授業が展開されていた。先生の指示は手短ではっきりと、板書もよく整理されていた。だれもが次の指示に従える状況になるまで待つ姿勢で学習活動が展開されており、自力で手早くできない子どもには声をかけながら手も貸す担任の先生の姿があった。配慮を要する児童は大勢いるのだが、大きな集団の中でもスムーズに学習に取り組む姿が見られた。

○ 支援の手だてが充実

指導案や研究紀要の中にも様々な手だてが記述されていたが、実際の授業の中でも提示に使う資料やプリント、本時の学習の中で活用できる掲示物などがよく準備されていて子どもたちの活動に役立っている様子が伺えた。

② 特別支援教室での授業

○ 児童一人一人の看取りの指導案への位置づけ

指導案の中に支援の程度がどのくらいなのかが明記されていたのが分かりやすかった。個々への支援が具体的であり、参考になるところが多かった。

○ 安心して学習できる授業

支援の方法の中に安心感を持たせるという内容が盛り込まれていたが、大切なことであると思う。該当児童がいかに見通しをもって、落ち着いた気持ちで本時の学習に参加し目あてに向かって頑張ることができるような配慮がきちんと行われていた。

③ 教室環境

個々の児童が当番活動等で自分のやるべきことをきちんと分かって自発的に行動できるようにということで、当番活動表などは一人一役で名前と分担が明示されていた。また、お互いのよさを認め合える集団づくりにも力を入れているとのことで、道徳や学級活動で、学習したことが学級の中に掲示として残されていた。本校の取り組みに取り入れられることもあるものと思い、たくさん写真に収めてきた。

(3) パネルディスカッションから

○ 認知特性に応じた支援、特別支援と通常の学級での指導がうまく連携が取れている。

○ 子どもの状況に応じて支援内容を決めている。支援体制がきちんとしており、気づきからの動きがすばらしい。

○ 先生同士の人間関係がうまくいっているのが分かる。

○ 子どもが困っていることを困っていると言える環境が、安心感につながっている。

○ 特別支援学級を通級型にすることで、入級時のハードルは低くなる傾向はある。

○ 支援のしすぎはよくない。どこまでの支援が適切なのかを見極めることが大切である。

○ 補充指導に重点を置きすぎると、学級担任のやるべきことにまで手を出してしまうことになる。

○ 配慮を要する児童への支援は、他の子にも有効である。いろんな子への助けになっている。

4 感想

文部科学省の研究開発学校の報告会ということで、かなり遠方であったが参加させていただいた。本校でも今年度は、課題研究で特別支援教育に取り組み、「一人ひとりを生かす学級づくり・授業づくり」というテーマで、どの子にも分かりやすいを求めて実践を始めたところである。東小学校の研究は、児童一人一人の捉えがすばらしい。個々の児童の実態から支援の方法を考え、支援シートを作成し、それをもとに個別の指導計画が作られている。そして、その指導計画に盛りこまれたことが指導案の中に位置づけられている。すべてのものがきちんと関連づけられ、実際の指導がしっかりと継続して行われている。支援体制も研究開発学校という特殊なところもあるかもしれないが、すべては子どもたち一人一人のために願って時間割等様々な調整が行われている。特別でない特別支援は、まだ十分に理解されているとは言えないので難しいところはあるが、学校全体でできるところから少しずつ取り組んでいきたいと思う。